

主張

入三

にアツラーにのり劇作は反響をたらしめ

（The main body of the page contains a large, dense grid of illegible characters, likely representing a corrupted scan of a document or a specific data table. The grid consists of approximately 10 columns and 10 rows of characters, which are mostly blacked out or severely distorted.)

ごく常識的に考えても死かしの復活は一種
 の創造の反覆であるとも言えるが、特にク
 ルパーンに於ては積極的にその考えられる
 のである。論文[1]で見たように、クルパー
 ンでは人間の死（つまり *barzakh* の人間）は
 全く *negligible* なものと扱われている。
 その意味でクルパーンは生のみに論じている
 とも言えるのである。つまりクルパーンに於
 てはアッラーと人間のかわりには徹頭徹尾
 生けるかわりである。生きてゐる人間とア

ッラ一とのかかわりである。具体的に言えば
 、(現世の時)肉体のある人間とアッラ
 一とのかかわりである。人間が生まれる前の靈
 魂の世界が前世であり、同様に、死後の靈魂
 の世界が来世であり、これは「現世の人間
と来世の人間とは全き連続の上にあると考
えられるのである。論文〔1〕で述べたように
 、クルアーンに於^⑤ては人間の死と眠りは同
 じ位相をもたされてゐる。死かゝる復活は眠
 りかゝる目覚めと同じ位相である。復活か死